

地域に根ざした芸術家のアトリエ計画

福島県福島市・美術研究所デルタの計画・設計を通して

会津大学短期大学部

産業情報学科

柴崎 恭秀

地域に根ざした芸術家のアトリエ計画

福島県福島市・美術研究所デルタの計画・設計を通して

柴崎 恭秀

平成 18 年 12 月 15 日受付

【要旨】地域の中で芸術家がアトリエを設けて創作活動を行うことは決して珍しいことではないが、そこでの活動が周辺住民に知られていることは意外と少ない。無論、アーティストによっては積極的に地域住民と関係をつくりながら活動する芸術家もいるだろう。しかし、多くの場合、そこでの芸術活動を公開している芸術家はごく一部に限られ、絵画教室などを行っている場合を除き、そこでの芸術家の創作行為は一般の人の目に触れることはほとんどない。

6年前、石川県小松市に「小松市立宮本三郎美術館」が開館した。当地出身の洋画家・宮本三郎没後26年目にして開館した美術館である。宮本三郎は金沢美術工芸専門学校(現・金沢美術工芸大学)油絵科の教授、多摩美術大学絵画科の教授を歴任し、二紀展を中心に活動した画家であるが、その自宅兼アトリエが東京都世田谷区奥沢にあったことはあまり知られていなかった。故郷に美術館建設の話が起こり、遺族と世田谷区が保管・管理していたアトリエを移築する構想が持ち上がったようやく知られるようになった。筆者も当時、この宮本三郎のアトリエ近くに居住していたがこの存在を把握していなかった。小松市で美術館の構想があってから取材する機会があったが、周辺住民にヒアリングしても知っている人は僅かだったことを記憶している。

アトリエ建築で有名な作品は、吉村順三設計の日本画家・東山魁夷邸や洋画家・猪熊弦一郎邸をはじめ、村上徹設計の「坂町のアトリエ」など、建築家の代表作品としても芸術家のアトリエはしばしば登場する。しかし、地域との関係性をもった事例はあまり多くない。われわれの日常では芸術家と交流することは稀で、唯一、展覧会やアート展、メディアによってその活動を知る程度であるが、本来、地域に芸術家が居住しそこで創作活動を行っていることということは、その地域にとっては意味深いものであり、その存在が知れることによって時には子供たちなどに創作のきっかけをもたらすことになる。その点で特に地域に根ざして芸術活動を行っているアーティストのアトリエは少なからずそこに対して開かれている部分を有するべきであり、自らの作品や創作活動を発信するインターフェイスの機能をもつことも重要であると考えます。

はじめに

2006年4月に開館した筆者設計の福島県福島市桜台の「美術研究所デルタ」は、福島市を中心に創作活動が続いている現代洋画家・渡邊晃一氏(福島大学人間発達文化学類助教授)の自宅に併設されたアトリエ兼美術研究所である。渡邊氏は絵画領域に舞踏などを組み合わせた芸術活動を国際的に展開する芸術家であるが、地域での芸術活動にも重点を置き、福島県在住の洋画家・橋本章氏(一昨年死去)や荒洋氏などとともにグループ展を積極的に行っている経緯がある。この美術研究所開館記念展には2日間という限られた期間にもかかわらず、地域の人々を中心に200人近い来場があった。

一昨年に設計依頼を受けてから、地域に根ざした芸術家と地域との関係をどのように構築していくかがテーマとなったこのプロジェクトの計画経緯や、ここで取り入れた新たな設計手法及び施工方法の研究についてここで述べたい。

1. 建物概要

| | |
|----------|---|
| 建物名称 | 美術研究所デルタ(アトリエ・美術研究所) |
| 所在地 | 福島県福島市田沢字桜台 |
| 敷地面積 | 534.70 m ² |
| 地域 | 都市計画区域・第1種低層住居専用地域 |
| 建物面積 | 73.27 m ² |
| 建物構造 | 木造軸組構造(大断面集成材による金物補強ラーメン構造) |
| 建物基礎 | 鉄筋コンクリート造ベタ基礎 |
| 階数 | 2階+ロフト |
| 軒高 | 6.99m・最高部高 9.7m |
| 屋根仕上 | 野地板厚 12+アスファルトルーフィング+ガルバリウム鋼板葺き |
| 外壁仕上 | シナ合板厚 12+現場発泡ウレタン吹付厚 25+防湿・調湿・防水シート+通気層厚 18+ 構造用合板厚 12+リシン吹付 |
| 内装仕上 | 壁・天井:シナ合板素地 柱・梁:大断面集成材素地 床:1階床 モルタル金ゴテ仕上(誘発目地入) 2階床 シナ合板素地 |
| 設備 | 照明・コンセント電気設備・弱電気設備、空調設備、給排水衛生設備 等 |
| 設計者・設計期間 | 柴崎恭秀+(有)戸田巧建築研究所(構造設計) 2004.12~2005.8 |
| 施工者・施工期間 | (有)山崎工務店+(株)小池住建(大断面集成材加工) 2005.10~2006.3 |

2. 計画概要

計画地は福島市外の桜台ニュータウンの一角にある。もともと大規模なニュータウン建設により高台を切り土により整地した住宅地の、既に住宅が建つ余地にアトリエを建設することになった。計画敷地形状は底辺が約 17m の三角形で、福島市による道路・隣地境界線からの建物外壁位置 1m セットバックの規定を盛り込むと、鋭角な三角形の敷地となる不辺形状土地である。また北側斜線規制、建物高さの規制を加味していくと、敷地傾斜地側である北側は極端に高さの制限を受けることになる。

与件(施主側の要望)は、最大面積を確保すること、1階が洋画のアトリエスペース、2階が日本画のアトリエスペースを確保すること、美術研究所機能として4万冊程度の美術書のストックができる書棚を確保すること、敷地を取り巻く環境である安達太良山、東山、蔵王連峰、阿武隈川の眺望を確保するベランダスペースを設けること、などであった。また、最も条件として厳しいものが施工費で、木造施工費の最低水準の坪単価が提示された。

以上の与件をクリアするために、建物構造は木造とし、施工費の観点から複合的な仕上材を用いない柱・梁・屋根構造材を同一の材料とすること、構造材が書棚などの家具を兼ねること、などを研究テーマとした。

はじめに敷地の環境特性を調査するなかで、敷地北側の傾斜地部分から冬季の吹上げの風を受けることが判明した。この部分はかなりの風圧を直接受けるため、木造では揺れやきしみの原因になることが分かった。そのため直接風を受けない壁・屋根形状を選択する必要があった。木造では近年、一般的には鉄筋コンクリートの布基礎、ベタ基礎に金物によって木製柱を緊結する工法が一般的だが、これは構造力学的にはピン構造といい、ボルト固定した強度として計算上はみる。つまりはネジ止めの方向には力学的に動くことを想定した固定方法になる。これに対して、本計画では、力学的には動かない意味の固定端をつくる研究を行った。この工法が本計画の最も特徴的かつ他にあまり例のない工法を提示することになった。具体的には建物基礎部に大断面集成材からなる柱の700mm程をコンクリート躯体に埋める工法である。これについては本計画の構造設計者である戸田巧氏が強度と木材に対する影響(水分による腐食など)を数年に渡り研究した経緯があり、それを実践することになった。これにより地震力や風圧に対する強度を確保し、かつコストを抑えることが可能になった。

3. 配置・平面計画

配置計画

敷地は福島市中心部より南に2km程離れた桜台ニュータウンに位置する。全体敷地は長辺が約48m、

短辺約 16m の三角形状で、北側が斜面になっており、斜面地は市が保有する森林である。敷地東側には 20 年程前に建てられた住宅が既にある。アトリエ計画は、この住宅部分を除く、西側に残された余地ともいえる部分に計画することになった。

敷地は福島市が指定する第 1 低層住居専用地域であり、北側隣地境界線から 5m 垂直に立上がったところから 1 : 1.25 の勾配で北側斜線規制という高さの制限を受ける。また、やはり市の規定による隣地・道路境界線からの 1m の外壁後退(セットバック)の規定が設けられている。さらに前述のような敷地の特性である北斜面を吹上げる風圧がかかることが予想されるため、北側部分の壁量を抑えて計画することになった。

また、敷地の特性としては、福島市の住宅地の中でも比較的高台にあり、周囲を取り囲む山々、福島市街地などが見渡せるロケーションにある。施主の要望でもあったがこれらを見渡しながらかつ創作活動の合間の緊張を緩和する環境装置を設けることを計画の骨子とした。

配置計画を進める段階で、この敷地を含む高台から阿武隈川までの広域断面図を作成した。桜台からの見下げの視点では阿武隈川は河岸段丘の下になり残念ながら見えないことが計画初期段階で判明し、それについては断念せざるを得なかった。(fig.1)

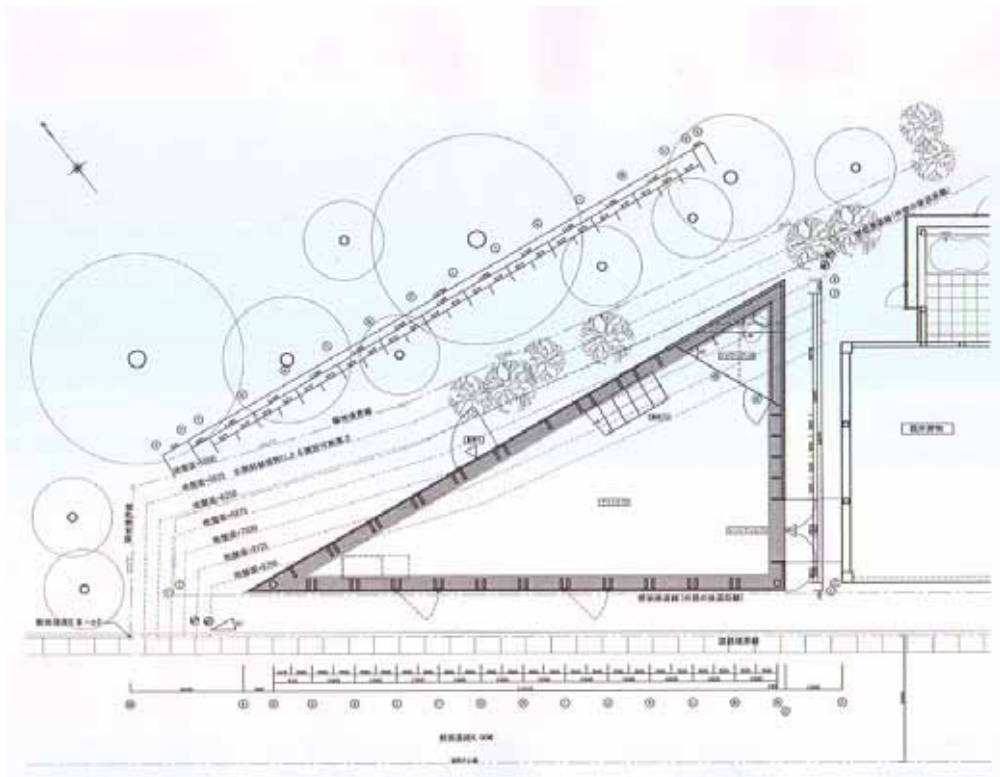


fig.1)配置図

平面計画

アトリエの構成は1階が洋画家のスペース、2階が日本画家のスペースである。渡邊晃一氏は洋画家であるが夫人は日本画家であり、アトリエスペースとしては2人の画家のスペースをつくることになる。1階は洋画を描く以外に石膏の型取りなどのスペースにもなるため、床は耐久性のあるモルタルとした。ここはギャラリーや美術研究所としての研究スペースにもなるため、基本的にはレイアウトの自由なフリースペースとし、アトリエの高窓北側採光の原則にも習わず、足元から視線程度までの横連想窓を設けることとした。

この横に連なる連想窓は、本計画の地域を意識した部分のひとつである。施主は自らの作品を地域に発信することを望み、常に作品が外部に向かってプレゼンテーションされ、それが入れ替え可能な(新陳代謝の可能な)ショーケースのようなものをイメージしていた。これを横連想窓で計画することにしたが、これが創作活動の際や裸婦モデルを立たせた時に外部から見えることになるため、一時的にこれを塞ぐことのできる可動壁(作品を展示する家具を兼ねる)を設けることにした。

その他、1階にはトイレなどの水廻りと合わせて、石膏型取りをした際の汚れを流すためのシャワー室などを設置した。(fig.2)

2階の日本画のためのアトリエスペースは、最大100号の大きさの日本画制作が可能ないようにレイアウトをしている。日本画は床置き作業となるため、100号のキャンバスを床に置いて周囲を巡りながら制作をするスペースが必要になってくる。床仕上げは畳敷きや板張りにするなど、画家によってまちまちであるが、計画ではコンパネの素地をそのまま床張りにするというシンプルなものにした。2階には隣接住宅から直接入ることのできる出入口を設け、1階のアトリエスペースとは吹抜けによって空間的には連続する構造とした。空間的な広がりや繋がりをつくることは無論だが、これにより大判のキャンバスの上げ下ろしが容易になる。

2階アトリエからは螺旋階段によって、ロフト状の屋内ラウンジに繋がっている。ラウンジからは北斜面の風景、隣接する樹木を間近に眺めることができる。また、ここから屋上に設置した屋外ラウンジに上ることができる。(fig.3)

3階の部分に相当するロフトと4階の高さ部分に相当する屋外ラウンジであるベランダは、スペースとしての存在を無くすことを理由に床を網目状の鋼材料(エキスパンドメタル・メッシュ)を用いている。見上げたときには足の裏が見える状態になるが、採光等はそのまま透過するため、空間のなかにあって透明性が高くなり、採用に至った。

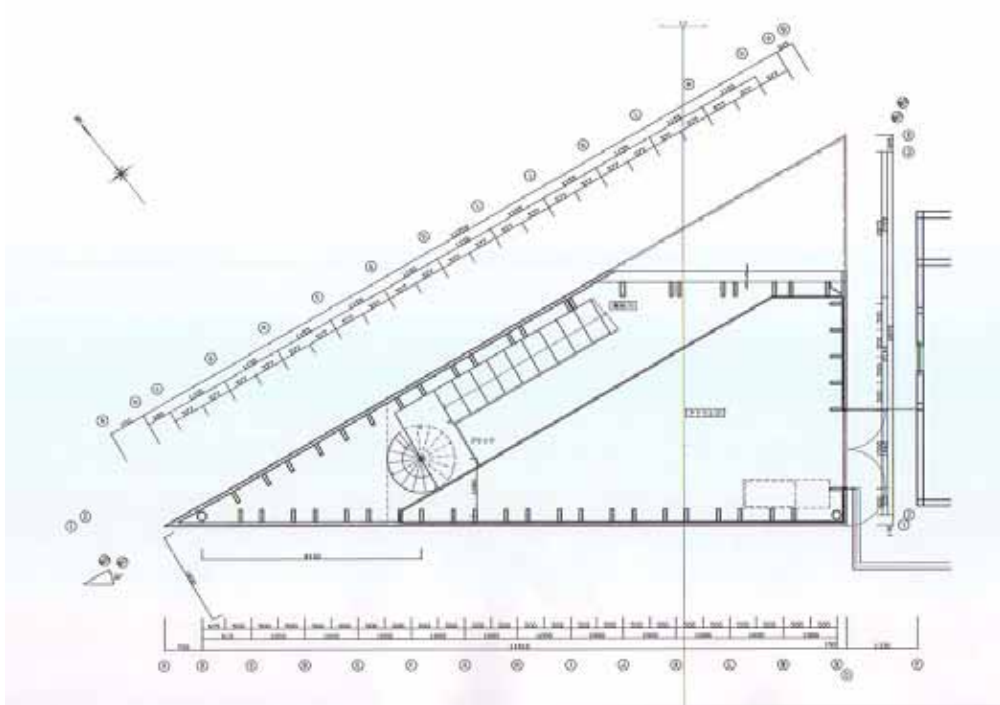


fig.3) 2階平面図

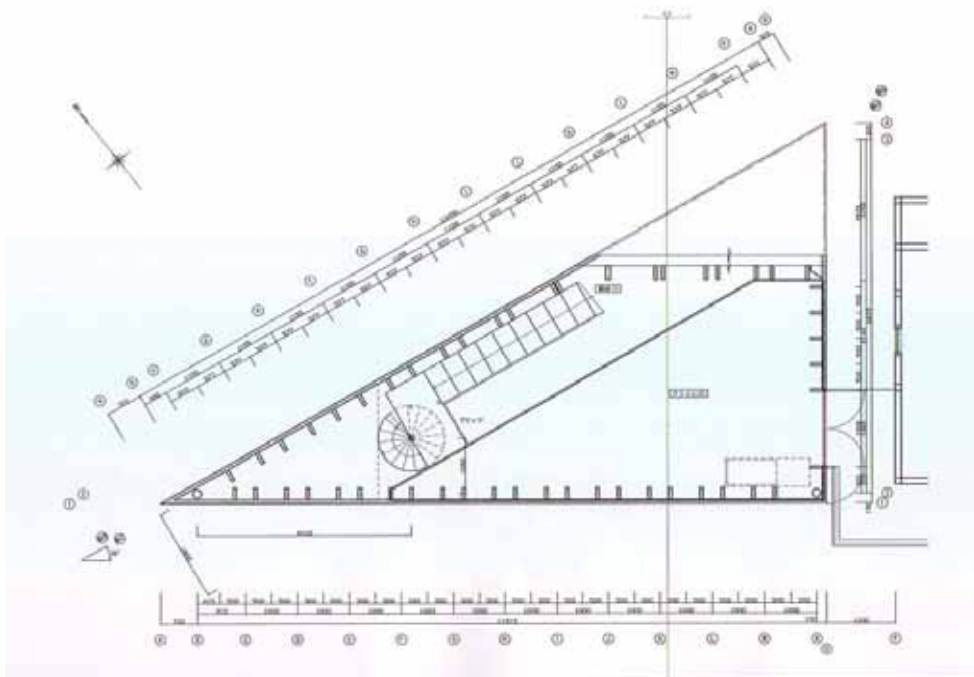


fig.2) 1階平面図

4. 立面計画

建築を計画するとき、立面計画は周辺環境との調和を計る上では最も重要な部分である。周囲との関係をどのようにつくっていくのか、街並みを構成する上でどのような外観にするのか、また、以降周囲に建物がつくられるとき、その計画に好影響を与え街並みを整える誘因的要素に成り得るかという点でも重要視する部分である。

計画アトリエは、最も人目に触れる道路側の壁面の高さで9m 近くなり、住宅地としては高い建物になるため、圧迫感、不調感を与えないようにフラットな白い壁とすることとした。これには2つの理由があり、ひとつは周辺環境に与える高さの軽減と街並みへの調和的要素としての外観デザインであり、もうひとつは地域との関わりをつくるための環境装置としての意味である。

渡辺氏の作品にはプロジェクターによる映像作品や美術館の壁面を埋める大きなサイズの作品がある。この白の壁は画家のキャンバスの役割をそのまま果たすよう、プロジェクターの投影スクリーンや絵画を展示する壁面となるように計画されている。規模の大きな作品が架けられるよう外壁上部にはステンレス製のハンギング・バーを設置している。(fig.4)

計画アトリエは底辺を除く4面体であり、鋭角な三角形である屋根、北面、東面と長方形からなる南面で構成されている。南面はフラットな壁面を強調するためにリシン吹付けの白とし、屋根面から北面にかけては雨水による汚れを考慮してガルバリウム鋼板葺きとしている。(fig.5)

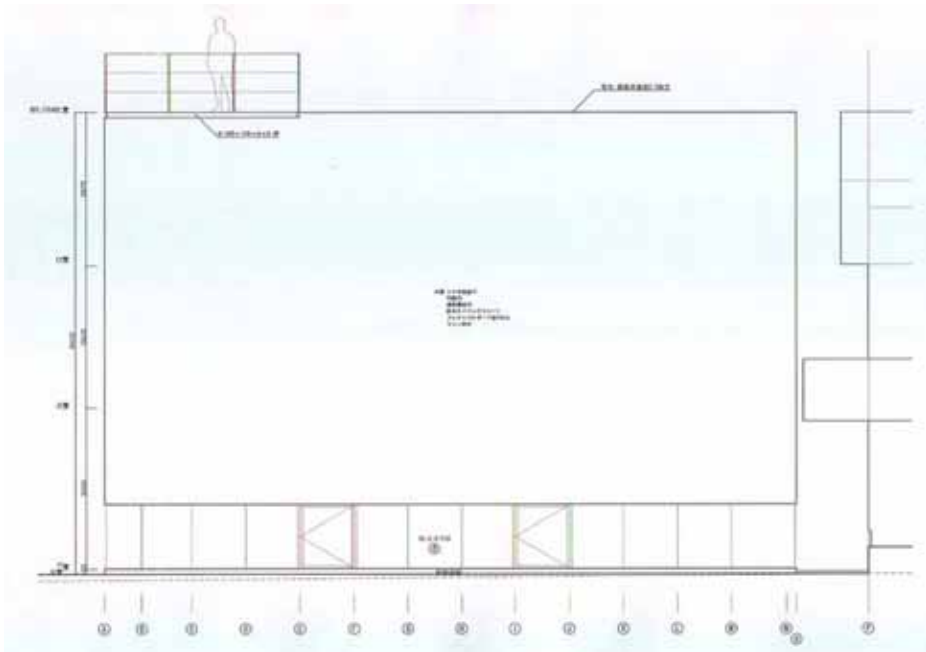


fig.4)南立面図

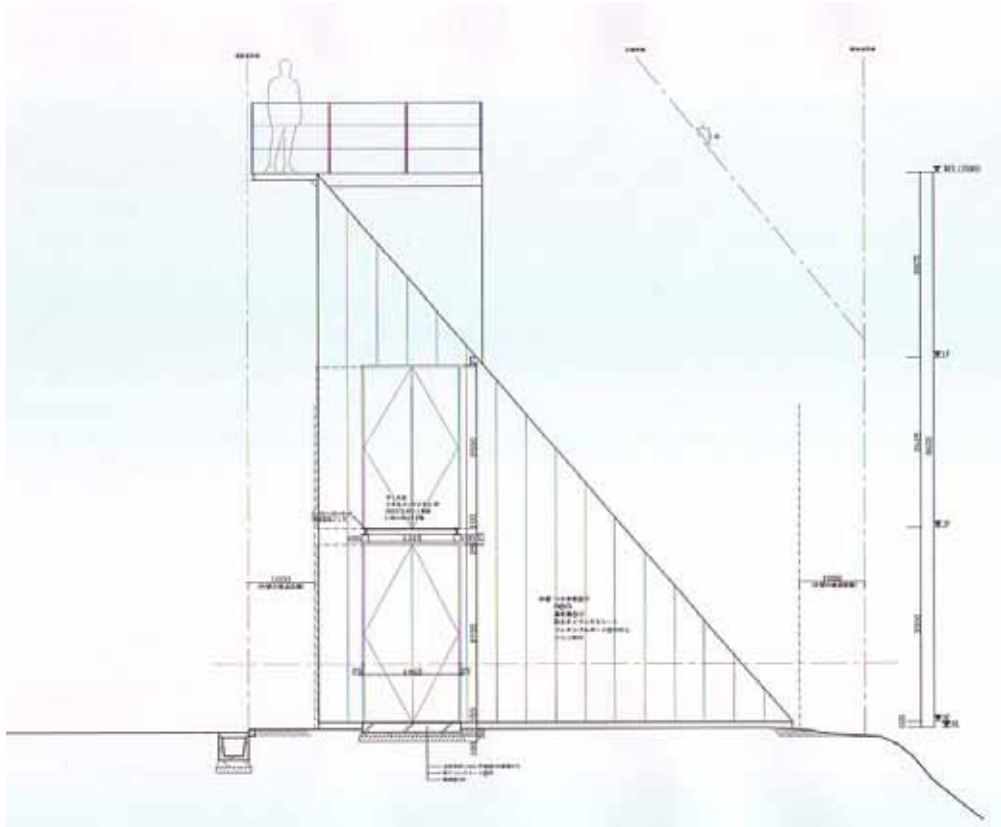


fig.4) 東立面図

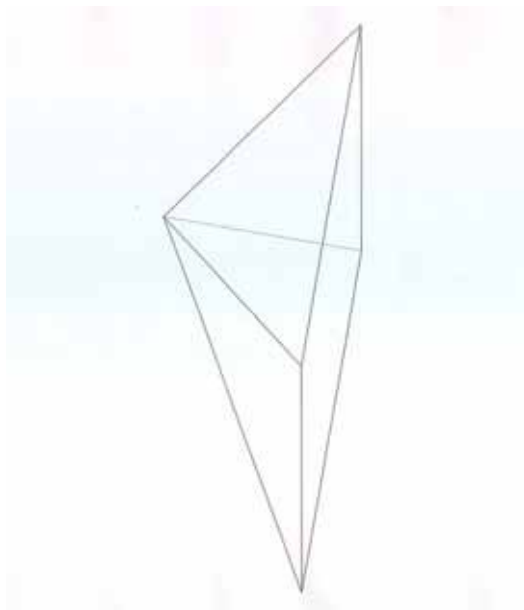


fig.5) 4面体で構成された壁面

5. 断面計画

断面形状は、東側端部の断面が三角形になり、西側に向かうに従って台形の上底に相当する部分が比例的に高くなっていく。建物最高高さが8.60m、ベランダ手摺りを含めた高さが9.70m、2階階高が3.00m、1階天井高が2.75m、2階天井高が4.70mである。大断面集成材235×60の柱・梁材が鋭角な三角形に並び、東面を除く全ての面を構成している。4面のうち3面は三角形のため力学的には力の閉じた計画になっており剛性は高い。

6. 構造計画

前述のように、本計画は大断面集成材を用いた軸組工法による木構造である。しかし、一般的な木造軸組工法とは異なり柱・梁・筋交いの区別がなく、全て同一の集成材により構成している。また、屋根頂部の繋ぎ材と端部柱材には補強のためC T鋼材とパイプ鋼材を用いており、木造金物補強構造としている。

大断面集成材による構造形式は近年急速に増えつつある工法であり、認定工場によるプレカットが容易になったことが原因と考えられる。本計画も敷地から遠くない茨城県常陸太田市にある認定工場で行っている。

構造計画のなかで最も特徴的なのが、基礎部との緊結方法で、木造軸組工法が金物によるピン接合に対し、本計画では柱材端部の約700mmをコンクリートに埋設して完全な固定端にしているところにある。ベタ基礎の周囲に一段下がった階段状のところを設け、集成材柱を基礎にボルト固定する。

コンクリートに埋める部分の柱材に防腐処理を施し、改めてコンクリートを打設するという行程を経て、コンクリートの硬化により柱材が固定端になる。昔で言うところの「掘っ立て」である。この工法についてはコンクリートの水分が腐食などの柱材に与える影響が心配されたが、それについては構造設計者による研究データがあり、コンクリートの乾燥と柱材の含水率のバランスから腐食に至らないことが確認されている。

その他、2階床を支える梁も三角形をつくる同一のデザインとし、これを屋根から鋼棒で吊るなど、デザイン的な統一の工夫をしている。また、4万冊に及ぶ専門書の収蔵もこの柱部分を書棚として利用することにより、荷重が床ではなく柱を通じて直接基礎に伝わることも考慮した。

(fig.6)

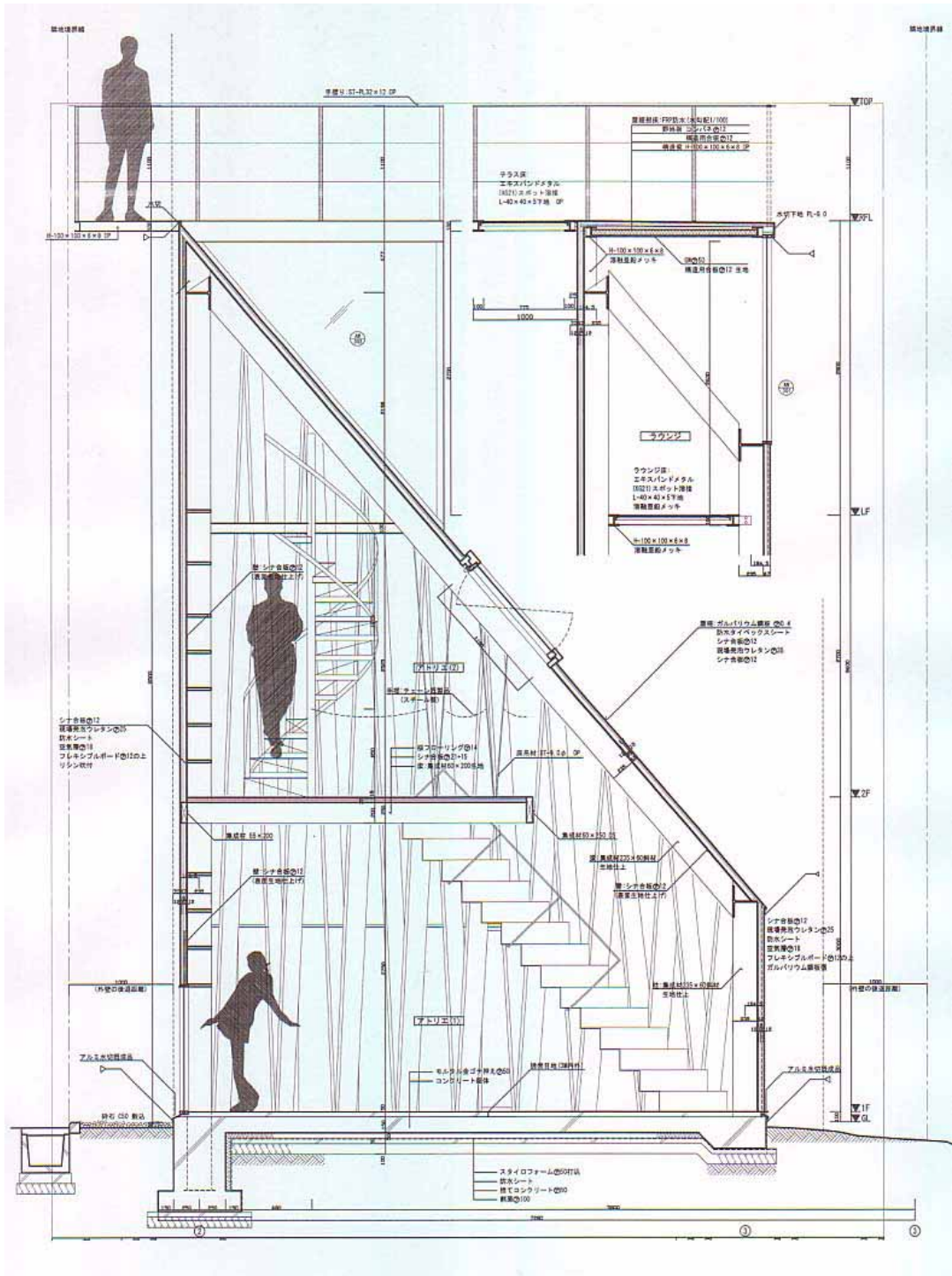


fig.6) 矩計図

7. 結び - 地域のなかにあること

地域のなかにあつて芸術家がそこを拠点に創作活動を続けることは、その地域にとって重要な役割を果たすと考えられる。ひとつには地域住民と芸術の接点が生まれる点にある。さらにはアーティストが外部から様々な分野の芸術家を誘引してここで展覧会や創作活動、ワークショップを行う機会がもたらされ、人々の日常にアートが組み入れられていく可能性をもつことになる。筆者が最も期待したいことのひとつには、地域の子供たちに与える影響である。日常的にアーティストがアトリエで様々な創作活動を行っている光景を子供たちが普段から眺めることにより、芸術の身近さと好奇心を同時に育むことができるからである。実際、計画アトリエが竣工して、アトリエ下部分に設けられた横連層窓にアーティストが作品を並べ、道を歩く子供たちがそれに関心をもって作品やアトリエのなかを覗いているようである。施主である渡邊氏は美術教育学会にも所属し、以前から子供たちにアートを学ぶ場を提供することに熱心で、展覧会などでは子供たちのためのギャラリートークやワークショップを頻繁に行っていた。イベントとして行われていた子供たちとの交流も今では日常的に行われているようである。アトリエ建築はどちらかといえば機能の性格上、閉ざされてつくられがちであるが、本来的には地域と交流していくためのスペースや装置をもつ必要があるだろう。

本来であれば行政が地域のなかのアーティストを積極的にピックアップすべきであろう。道路建設費か、公共施設維持管理費か、予算の僅かな数パーセントを街のなかにアートを置く費用に充てて欲しい。そしてその制作を地域に根ざした芸術家に依頼して欲しい。地域住民と行政、そしてアーティストが相互に働きかけ合いながら身近なところ、子供たちの生活する場所にアートをレイアウトしていくことができれば豊かな街にかわっていくだろう。

参考文献・出典

「吉村順三展 - 建築家吉村順三の作品とその世界」新建築社 2005

「若手建築家のイディオム」新建築社 1992



アトリエ外観



構造計画モデル



外壁・ベランダ外観



アトリエ内観



書棚を兼ねた柱材



展覧会風景



2階アトリエ風景



ベランダの見上げ



近隣からの風景